

ユリシーズ 第14挿話の考察

ミレー作「乳牛の誕生」 1864
画像はwikipediaより



*あくまで素人の考察なので誤りもあるかと思いますが・・・アマチュアの特権ということでご容赦ください

2021/10/24 ぬしろかずや

何が第14挿話を難しくしているのか

- ・古代英語～現代英語のスラングに至るまでの多様な文体の使用
- ・分かりにくい寓話
- ・猥褻表現の隠喩達
- ・これまでの挿話を跨いだエピソード達
- ・酔いとともに論理性を失う会話
- ...

以下、難解だった箇所を中心に考察することでジョイスの伝えたかったことを紐どく

祈祷～登場人物の紹介

ホーンハ(U-Δ,14,13-16)

- ・冒頭の太陽神に対する祈祷
→牛は繁殖の象徴であると同時に太陽神の遣いである。挿話内では避妊・堕胎といった繁殖とは対の概念が議論されるが、これは神に対する人間の罪であると同時に人間による太陽神の牛殺し(繁殖の拒否)に他ならない。
- ・繁殖の継続に勝る国家の繁栄はない。全ての妊婦に対しては最大限の配慮がなされるべき。
→舞台は貧しき者へも開かれた国立産婦人科病院へ

ブルーム氏の訪問(U-Δ,14,17)

- ・ミセス・グリーンよりピュアフォイ夫人が3日間に及ぶ難産であると聞かされたブルームは(U-Δ,8,390)心配で病院を訪れる。
- ・ピュアフォイ夫人と彼は昔同じ所に住んでいたとあるが、最近では街で会っても挨拶しない程度の仲であったとのこと。
→ブルームは家に帰りたくないためわざわざ産院を訪問した。

オヘア医師(U-Δ,14,17)

- ・ジョイスが実際に知っていた医師とのこと。公衆衛生官として従事した彼はその時の病が元で若くして亡くなった。

待合室での飲み会(U-Δ,14,19)

- ・当時の病院の待合室では親睦会も兼ねて飲み会を催しており、それには病院関係者以外も参加できた。
- ・レネハンは事前に6/16に国立産婦人科病院で飲み会があることを事前に聞きつけタダ酒にありついた。

母の死か子の死か(U-Δ,14,23-24)



「さなり、御いつくしびのマリアにかけて、女は生きみどり子は死すべきなり」(U-Δ,14,23)

皆は母親の命こそ救うべきだと言う

みどり子は小暗くて何のあやめも見わかぬ地獄の辺土にて、母親は煉獄の火のうちにて造り主をなむ、(U-Δ,14,24)
= 洗礼を受ける前の子は地獄を彷徨うが、教徒である母は清められ天国の道が開かれる

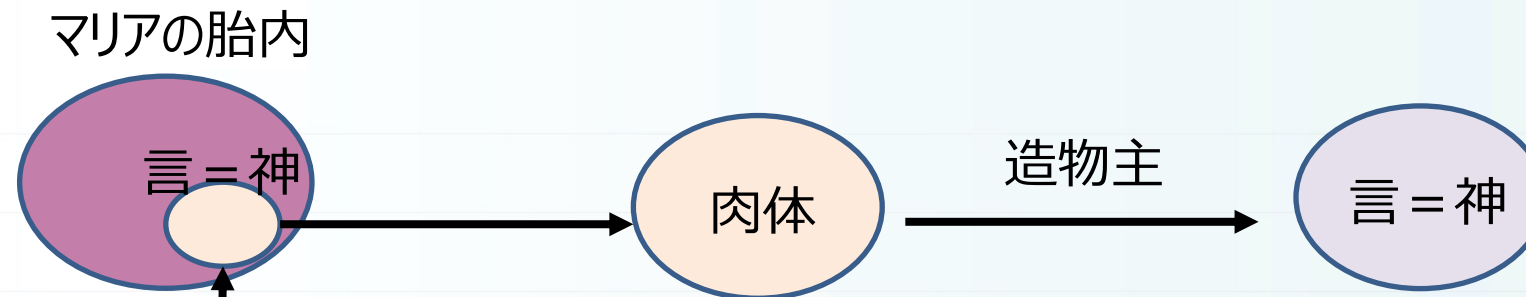
- ・スティーブンは子の命こそ救うべきだと主張している。
- = 母の死にうなされるスティーブンにとって「母の命こそ救うすべき」という考えに同意することはできない。
- ・さらにこの文からはスティーブンの「優れた芸術を生み出すためには犠牲が必要である」という考えも読み解くことができる。
- = 第14挿話は「生命」を「芸術」に掛け、出産へと至る道を文体の変遷、難産を新しい芸術の生みの苦しみと説いている。

我らが夜な夜な、勢ひなきものになし果つる、神の御力に勢ひあるべき魂はいかに。こはき聖き霊と主にして生命の与し主なる神に逆ふ罪にこそあんなれ。殿原よ情欲は束のあひだのものにして、いと儚くなむ(U-Δ,14,24)
= 生の力を有しながらも私達は夜な夜な無駄にしている(射精・避妊)

中段の考察と合わせるとこの文は「自身の芸術的才能を酒場での議論に浪費するスティーブンに対する皮肉」とも読める

マリアの処女性(U-Δ,14,27-29)

「女の子宮において言は肉体となり、造物主の御心において変わりゆくあらゆる肉は変わることなき言になる。」



神二生誕ヲ贈ル全能ノカ = 神の子であるマリアが神を生む循環
神を創造しマリアは第二のイブ(いずれもU-Δ,14,28)

マリアと鳩の動物合体 (U-Δ,1,52) による妊娠。これによりマリアの処女性は担保される

||

全実体変化 = 鳩に見えるものは実は神
実体共存 = 鳩の中に実は神が宿る

乾杯の酒→ミサにおけるぶどう酒とピュアフォイ夫人の出産よりスティーブンはこの一連の説を連想

スティーブンの牛殺し(U-Δ,14,31-34)

人生

生前と死後に関しては暗闇である

聖書

私たちがどこから
来たのは不明である

報われないエピソード達
= 旧約聖書での埃及での体験の如く

モーセの墓はどこにあるか誰も知らない
死後の世界は誰も経験したことがない

「生前 = 死後」ならば成長は生前に向かうのに同義(=後退的)

後退的变化

生前

誕生

死

死後

暗闇

- ・生前、現世、死後と当たり前に受け入れてきたことを実は何も知らない。暗闇である。
- ・この事実によりスティーブンは聖書を解体しようとしている。
- ・後に牛 = Bull = 教書であることが明らかとなるがスティーブンは聖書を解体することで、牛を殺害する。
すなわちこれは第14挿話の下敷きであるオデュセイアにおける「太陽神の牛の殺害」に他ならない。
= ツアラトウストラはかく語りき(U-Δ,14,32と90)にあるようにニーチェによる神殺しを彷彿とさせる。
- ・この後、神の怒りに触れたスティーブンには雷が落ちる(=牛を殺されて怒り狂うゼウスの如し)。

雷～牛にまつわる議論

怯えるスティーブン(U-Δ,14,35-38)

- ・スティーブンは雷に怯えてたがかといって信仰心があるわけではない。
- ・彼は以前はマッデンと同様信仰心があったが「藪のうちなる二羽の鳥」を追うあまり失ったのだ。
(=「若き芸術家の肖像」におけるスティーブンの罪のことか)
- ・しかし、スティーブンに限らずここにいる全員が「藪のうちなる二羽の鳥」を追う者であるのだ。

口蹄疫(U-Δ,14,41-42)

- ・口蹄疫に感染した牛の殺処分について。この大量の牛の殺害にも「太陽神の牛の殺害」がかかる。

牛と教書(U-Δ,14,44-47)

- ・教皇ニコライは英王ヘンリー2世にカトリックの布教と引き換えにアイルランドの統治を認めた。
- ・この時ニコライはヘンリー2世にエメラルド入りの黄金の指輪を送ったことから、エメラルドの鼻輪を付けた牛を送り込んだと揶揄された、(Bullは牛と教書の両方の意味を兼ねる)
- ・牛(=教会)は牧草地(=緑はアイルランド国旗にあるカトリックの象徴)を増やすとともに大きな組織を作った。
- ・しかしヘンリー8世の治世時、イギリスでは国教を英国国教会に改宗したが、アイルランドでは改宗に失敗しカトリックが残った。
- ・これによりアイルランドは政治はイギリス、宗教はローマ・カトリックに支配されるというジレンマに陥った(U-Δ,1,56)。
=「アイルランドの牡牛に手を出す者。ジレンマの角にひつつからん」。
- ・同時にこのジレンマは半人半獣の「ミノタウルス」にも象徴される。
- ・ちなみに第14挿話の舞台ホーンの館は「角」に掛かっている。

猥談

バノンとミリー(U-Δ,14,52-55及び97)

- ・ミリーのことを皆に惚気るバノン。誕生日の贈り物はブルームからのプレゼントの帽子(U-Δ,4,164)。あの時外套(コンドーム)があれば浴びる(射精)ことなかったのに。。。→以後、「外套」と「浴びる」ことの猥談が繰り広げられる。
- ・挿話の終盤バノンと一緒に飲んでいた「外国人」がミリーの父ブルームであることを知り急いで退散する。

ブルーム氏の恥ずかしい過去(U-Δ,14,61-62)

- ・思春期に手淫を覚えたブルームはそれに熱中する。
- ・ブルームは妻との義務(性行為)を履行しない。代わりにブルームは女中に手をかけようとする。

マリガンのシェイクスピア論 (U-Δ,14,66-67)

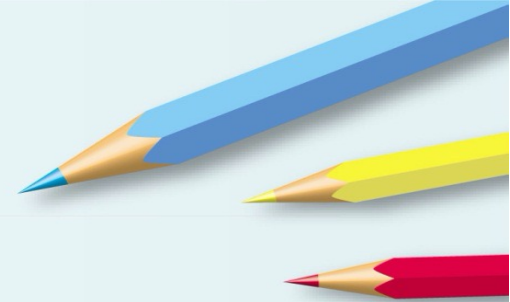
■ 書かれていること

- ①マリガンが語るヘインズの話に一同血も凍る恐怖を味わう。
- ②ヘインズはケルト文学書と毒薬を持って現れる。
- ③彼はサミュエル・チャイルズ殺しの犯人は自分であると語る。
→実際にはサミュエルは兄の殺人容疑にかけられた人である。しかし、マリガンはこれをヘインズが3男とすることで矛盾を解決。
→チャイルズ殺人事件は弟による兄殺しの事件であり、それはハムレットを連想させる(U-Δ,7,344)。
- ④ヘインズは亡霊に付き纏われているとのこと。
→ヘインズは黒豹の亡霊に付き纏われているが(U-Δ,1,18)マリガンによるとそれはヘインズの父の亡霊とのこと
- ⑤ヘインズはマリガンに11時10分のウェストランド通り駅で会うよう伝える→ヘインズが終電でマリガンに帰るよう促す。
- ⑥「それはマナナンの復讐(賢者)、復讐法(マリガン)」と言う声あり。
- ⑦蜘蛛は人里離れたところに巣を張り、そこには祟りがある。そこは殺人屋敷となる。

■ 以下、考察

- ①、⑥：マリガンは第9挿話でエグリントンより誘われたムーア邸での会合の出来事を話している。賢者は参加者の一人。
- ③、④、⑦：サミュエルにより人里離れた場所で殺害された兄は亡霊となった。この亡霊は黒豹となりヘインズの元に現れる。
この亡霊に唆されたヘインズはサミュエルを殺害すると復讐を遂げる。
- ②：ヘインズはサミュエル殺害直後にこの場に現れる。**彼の持つ「毒薬」とは凶器である「拳銃」である**(だからこそ一同震撼)。
- ⑤：そしてヘインズは友人であるマリガンに待ち合わせ場所を告げ館を後にする。

すなわちこの寓話はスティーブンが参加することができなかった文芸復興運動の会合の場で、彼の自論をヘインズの狂気とチャイルズ殺人事件を用いてパロディ化した、**マリガンによる悪意に満ちたシェイクスピア論**である。



ブルーム氏と星座の物語 (U-Δ,14,70-72)

この部分は三角形のビールラベルを見ながらブルームがおぼろげに瞑想するシーンであり無意識に近い状態にあることから論理的な記述はなされていない。従って書かれていることとその意味を解釈することでブルームの深層心理にある物語を紡ぎとる。

個人的な解釈

ここでは天文学に興味があるブルームらしく、**死んだ動物達が死海を通じて輪廻転生し天上の星座へと至る物語**が描かれる。

書かれていることとその解釈

- ・草原にいる牝馬と子馬→澆刺と生きている動物達
- ・梟とヤツガシラ→死への担い手
- ・厚き雲とその公道を行く獣類の亡霊→死後に空・天海へと至る道
- ・雷は蠍の如し→蠍座へと至る
- ・牛達は死海を目指す→死海とは文字通り“死”を連想させる湖であることから死せる生き物はここに至る
死海は浮力が多きことからこの場で地上から天上へと浮上する
- ・彼は復讐に燃えていて太陽を殺めるものなり→星座が見える夜において太陽は沈んでおりすなわち殺められている。
- ・死海に辿り着いた馬は天空へと羽ばたく→ペガサス座と子馬座の誕生
- ・処女宮の上に飛び立つ→乙女座の言及(永遠の花嫁～ヴェールは乙女達の物語が続く)
- ・牡牛座の眉上三綾→死海に押し寄せた牛の大群は牡牛座となる
そしてその近くには冬の大三角形あり

回想～誕生

ブルーム氏の1日の回想 (U-Δ,14,70-71)

酔っぱらったブルームは三角のビールラベルを見ながら、母馬に導かるる牝の仔馬＝初々しいミリー(U-Δ,4,157など)、アゲンバットタイムス(U-Δ,4,156)、死海(U-Δ,5,179)、野獣の群れ(U-Δ,6,243)、輪廻転生(U-Δ,4,161)、ヴェール(第13挿話のガーティ)といった1日の出来事を回想する。

ブルーム氏とスティーブンの出会い(U-Δ,14,86-87)

異国風の肌の温かさ：モリー

4つか5つの男の子：スティーブン

マット・ディロン家の館でブルーム(21歳)はモリー(16歳)を初めてみる(U-Δ,11,238)。

1887年にディロン家の館でブルーム、モリー、スティーブンは初めて出会い、ブルームはその時のことを回想している。

ピュアフォイ夫人への讃歌(U-Δ,14,90-91)

母＝乳を与える牛と表現し(U-Δ,1,40に似た描写)、出産を終えたピュアフォイ夫人を称える。

それとともに控え室での議論(＝第14挿話自身)は生命の誕生に比べればちっぽけなものと自己言及する。

⇒スティーブンの芸術至上主義に対するジョイスの自己批判であると同時に

ユリシーズのテーマを「生」の讃歌(生活者の「生」であり、生きることに対する「生」とも取れる)とするジョイスの覚悟とも取れる。

第14挿話まとめ

- 古代英語～現代英語のスラングに至るまでの多様な文体の使用
 - 「生命」を「芸術」に掛け、出産へと至る道を文体の変遷、難産を新しい芸術の生みの苦しみと説く。
- 分かりにくい寓話
 - 複数の寓話において「太陽神の牛殺し」が行われている。
 - すなわち象徴としての牛(繁殖)、言葉としての牛(Bull)、実際の牛(口蹄疫)の3種の牛の殺害。
- 猥褻表現の隠喩達
 - お産で苦しむピュアフォイ夫人の横で猥談が行われることで却って出産の崇高さが際立つ。
 - それによりユリシーズのテーマの一つである「生の讃歌」が浮かび上がってくる。
- これまでの挿話を跨いだエピソード達
 - 「マリガンのシェイクスピア論」や「ブルーム氏と星座の物語」など他挿話の知識を組み合わせることで読者にストーリーを創作させる解釈の幅を持たせる。
- 酔いとともに論理性を失う会話
 - 第15挿話への伏線。